

事例-1 なぜ母親は怒ったのか・・・

ある園での電話相談です。ある母親が「自分が子供にひどいことをしているので辛い」と訴えてきました。あれこれひどいことをしていることを例を挙げて述べた後、彼女は「私ってやっぱり虐待しているのですよね。こんなにひどいことをして」と同意を求めてきました。

相談に乗っていた保育士は返答に困り。とっさに「お母さんお母さんみたいに自分は虐待しているのではないかと思っている人、最近多いんですよ。ほんとたくさんいるんですよ。でもね、お母さん、お母さんは自分でこれではいけないのに自覚しているではないですか。大丈夫ですよ。それだけ自覚していれば。」と言ってお母さんを励まそうとしました。

すると、そのお母さんはどう言ったか。

「え、私みたいな人はたくさんいるんですか。へーえ、そうですか。私ってたくさんいる中の1人なんですか。そうなんですか、ワンオブゼムなんですね、私って。わかりました。」と言って、電話をガチャンと切ったのです。

その保育士は電話を突然斬られてびっくりしてしまったのですが、どうしてそんなに怒らせてしまったのか、わからないといえます。

出典：永野典詞・岸本元気『保育士・幼稚園教諭のための保護者支援』風鳴社,2016,p2

事例-2 急に起こりだしたお母さん

3歳児を担当する保育士です。

入園時に「障害児加配」の枠で入ったお子さんがいます。親御さんと協力して育てていきたいと思い、送迎の折や、個別面談の時間を作り、いろいろお話しするようにしています。

「他人である先生がそこまでしてくださるなんて」と真剣に私の話を聞き、またご自分の恵まれない、子ども時代のことを話してくださるなど、心から頼られている瞬間がありました。

この信頼関係を基礎に、徐々にお子さんの日中の生活について、率直に伝えるようにしたところ、手のひらを返したように怒り出し、園長ではあきたらず市役所にまで文句を言いに行くほどでした。

私は今まで苦勞して作り上げてきた関係が根底から覆されたみたいで、すっかり人間不信に陥ってしまいました。

このようなお母さんと今後どのように付き合っていけばいいか、わかりません。

出典：中川伸子『発達障害の子どもの育ちを応援したい、すべての人に Q&A で考える保護者支援』学苑社,2018,p16

事例-3 娘をネグレクト状態にしている母親

2人の姉妹のきょうだいのうち、兄は可愛がっているが「妹のことは生まれてから1度もかわいいと思ったことがない」とのこと。お弁当のおかずには確実に違いがあり、扱いの違いが極端である。

離婚しているが、まだ以前の夫と一緒に暮らしている。しかし彼氏が別において、家事、育児はほったらかしで遊びも呆けている。食事もまともに与えておらず、服も同じものを着ていることがよくあり、猛暑でも風呂に毎日入らないため異臭がする。

出典：楠凡之『「気になる保護者」とつながる援助 「対立」から「共同へ」』かもがわ出版,2008,p80

保護者と一緒に考える保育 傾聴と対話を



上原真幸（熊本保問研・熊本学園大学）
Masaki Uehara

日常の保育の中で、保護者との関係づくりを意識して過ごすことは、保育者にとって当たり前のことになっています。一〇年前頃は、保護者を指す学生から「モンスターペアレントってやっばりいますよね?」「保護者対応をできる自信がないから、保育園に就職するのはためらう」などの声も頻繁に聞かれていました。しかし、ここ数年は学生からの声も少し変わってき

ているような印象があります。保護者支援が、保育を学ぶ学生にとって当たり前の視点になっていくように思えるのです。大学のオープンキャンパスに来る高校生からも「子育て支援を学びたい」という声が聞かれます。言葉の理解だけだとしても、保育のキーワードとして高校生の時点で既に学んでいることに、社会の変化を感じます。

ただ、社会が変化したからといって、保育者が保護者への対応に戸惑いを感じるようになってきたわけではありません。最近も「発表会前日のお迎えの時に、子どもに『明日頑張ろうね』と言ったら、保護者から『明日何かあるんですか?』と尋ねられた。前からお知らせしていたんだけど」という話を聞きました。コロナ禍において、「明日から数日休みます」とお迎えの時に言われて、「登園自粛かな?」と思って尋ねたら、小学校に通う兄が濃厚接触者となり、昨日から熱発していた。昨日検査を受けてさっき検査結果が出て陽性になったから、弟のこの子も明日から休ませるって。兄が熱を出した時点で休ませることを考えてほしかった」などの声もありました。

発表会が明日だと知らなかった保護者の方は、日々の慌ただしさの中、おたより等のお知らせを広げて読むまでに至らなかつたのかもしれない。コロナ禍の保護者の方は、兄の濃厚接触+熱発+検査に連れて行かなきゃという事実慌てて、弟も万が一感染していたらということまで気が回らなかつたのかもしれない。

せん。保護者の気持ちを慮ることはできません。ただ、行事に向けて張り切っている子どもの姿を知っている保育者や、毎日懸命に感染対策をしている園や保育者の立場からすると、「勘弁してくれ」と愚痴を言いたくなる感情が出てくることも仕方がないと思います。保護者の思いと園側の思いと、互いの思いを伝え合い、互いを理解しようとする関係づくりについて、私が四歳児クラスで担任をしたA児とその保護者とのことを紹介しながら考えたいと思います。以後、A児の保護者のことをBさんと表記します。

保護者の「目標(ねがい)」を聞く

A児はダウン症です。二歳児クラスから入園しました。A児は、二歳児クラス入園時にはまだ歩行ができず、ハイハイでした。言葉もいくつかの喃語が出る程度でした。一年で歩行ができるようになり、三歳児クラスに上がる頃には歩行も安定し、短い距離であれば他の子と一緒に散歩もできるようになりました。

四歳児クラス四月の時点で、A児の発達年齢は運動機能と知的機能ともに一歳半〜二歳児程度でした。主担任の私ともう一人副担任が入り、二人担任二五人のクラスです。どちらがA児の加配という役割にせず、どちらが週の主担当、もう一人がA児を含めクラス全体をサポートするという役割分担にしました。

新年度の早いうちに一度Bさんと面談をしたいなと思っていました。A児の保育についてBさんの思いを知りたいと考えたからです。すると、新年度初日の連絡ノートに「新年度が始まるにあたって、早速ですがお願いしたいことがあります。まず、連絡ノートはこれからも続けていいですか？もう一つ、これからの一年間の目標を決めて、家庭と園の両方で実行できたらと思っています。いつか話し合いの時間を設けてもらえますか？」と書いてありました。「もちろんです、面談も私からもお願いしたいと思っていました」と返事を書きつつ、夕方のお迎えの際にも口頭でその旨をお返事し、数日後の保育後にBさんと面談をすることにしました。

でもA児の身体に問題がないか、避けた方が良い活動はあるかなどを尋ねました。ダウン症児の一般的な特徴として挙げられる、頸椎の不安定さや心機能への影響等が気になったためです。

Bさんは「ワーク等の活動は、Aにはまったく『正解』の内容もわからないと思う。ぐちゃぐちゃに書くかもしれないが、他の子がワークをしている時間には同じワークを使わせたい。体育教室は、A児は体を動かすことは好きなため、きつと楽しく参加するだろう。療育でも鉄棒など楽しんで行っているから」とのことでした。跳び箱に乗って跳んで降りるなどは段差を他の子より低くする、万が一を考え、担任が横に必ず付くようにし、頭からの転倒を防ぐなど、A児の様子を見つつ、ここはサポートしたほうがいいという部分はサポートすると決めました。「私たちもどこまでAちゃんができるかは、やってみないとわからないけれども、楽しいと思ってくれるように過ごします」と伝えました。

面談を経て、Bさんの思いには、他の子と同じに過

面談で伺った目標は、

①トイレトレーニングを頑張る。日中はパンツで過ごす。

②活動は他の子となるべく一緒にAのペースでさせてほしい。

というものでした。

①のトイレトレーニングは、園からも提案しようと思っていたことと一致しました。午睡時以外はパンツで過ごし、パンツの着替えを毎日四枚くらい持たせてほしいことをお願いしました。ただし、降園時は排泄が間に合わずに車が汚れることを避けるため、帰る直前にオムツにすることを確認しました。

②他の子と一緒に活動は、どの程度一緒にして良いか、担任としても確認したいことでした。四歳児クラスからは、線結びなどのワークも時々取り入れていました。A児の発達年齢に合わせた内容のものを準備する方がいいのか、他の子と同じものを使用して良いのかも尋ねました。週に一回の体育教室（とはいえ運動遊び程度のもの）もあるが、跳び箱や鉄棒はどの程度させ

ごさせてほしいという気持ちが強くなることに気付きました。ただ、それは決して他の子と同じレベルで達成できるようにしてほしい願いはありませんでした。A児は他の子の半分の年齢くらいしか発達はしていません。けれども、少しハードルを下げることで、同じ楽しさを経験することはできます。その機会をゼロにしたいくないという思いでした。

加えて、他の子の中にA児がいることで、他の子にとって、世の中にA児のように障がいを持つていたり、いろいろな特徴があったりする子がいるのだということとを、当たり前前に感じられる場であってほしいという思いをお持ちでした。A児の存在を当たり前と思える子が一人でも増えることが、ゆくゆくはA児にとっても幸せな世の中になるはず、との願いも伺いました。

友達と「一緒」の生活

園生活の中で、どうやったらA児がA児なりの「同じ」活動を楽しめるか、また、担任がA児と常に一緒

にいるのではなく、極力子どもたちの中でA児が過ごせるために、どうするか担任と副担任とで検討しました。例えばお散歩は、A児の歩行はゆっくりです。でも歩けません。友達と手をつなぐこともできません。A児と手をつなぎたい子が手をつなぎ、途中で担任と交代するなどしました。手はつながなくても、ずっとA児のペースに合わせて歩く子もいました。

給食時のA児用の椅子の準備なども、年度初め頃は担任がしていましたが、A児と同じグループの子が「もってくる」と言い、それからはたいてい誰かが準備してくれていました。A児も自分の手伝いをしてくれる子を頼り、「てー！ てー！（としての意味）」と言えるようになりました。

すべて友達がしてくれるかというところではなく、例えばズボンを履くとき、A児は「てー」と担任に持ってきます。「自分で履こうね」と伝えると、友達のところに行き「てー！」とズボンを差し出します。子どもたちは担任を良く見えています。「Aちゃん、ちゃんとじぶんでせんとよ。ほらすわって、こっちから」と担任

のようにA児に伝え、ズボンを広げたり、次はこっちと足を指差したり、サポートしてくれます。

すべての子がA児と自ら関わるわけではありません。特定の五〜六人程の子が、日替わりでよく一緒にいるという様子でした。Bさんは「みんながみんなAを受け入れるとは思っていない。否定しなければいい」と仰っていました。担任としても、A児との関わりを、全員に指示的に求めるのは違うのではないかと考えました。障がいの有無に関わらず、仲が良く気が合う子、そうでない子があります。遊びや生活で、仲が良い子たちが集まるのは自然なことです。ただ、クラスの活動の中でA児がいろいろな子と手をつないだり、一絡のグループになつたりするように意識しました。

運動会のリレー問題

運動会が近づいてきました。園では、四歳児クラスと五歳児クラス合同の紅白リレーがあります。トラックを一周走ります。普段の遊びのなかでもA児は一周

を走っています。ただ、運動会当日、他のかけっこや遊戯等を行った後、午後の最後の種目であり、A児に疲れが出ているだろうことは予測ができます。また、当日は小学校のグラウンドで行うため、園庭より一周の距離も少し長くなります。A児の身体に負担をかけすぎることがないのかどうか少し心配でした。

そこで、連絡帳に「運動会に向けての練習がもうすぐ始まります。リレーはAちゃんもみんなと一緒に距離を走っても大丈夫でしょうか？もし難しいようであれば、Aちゃんは半周にするなど、考えようと思います。Bさんの考えはいかがですか？」と書きました。すると、翌日の朝、Bさんから「先生、今日ちょっと長く書いています」と連絡帳を渡されました。開いてみると、

「こっという問題はこれから先、必ず出てくる覚悟はしていました。親としてはチャレンジさせたい気持ちがあります。けれどもリレーはチームの勝敗がありますからね。親としては『チャレンジさせたい』と『迷惑はかけたくない』の葛藤です。プラス『Aにとって何

が一番良いチョイスか』が加わって複雑です」というお返事でした。また、その後の文に、他の子が「Aがいるからチームが負ける」と言い出すだろうから、半周でバトンは渡して残りの半周はAはバトンなしで走るのはどうかという提案もありました。

Bさんの一周走らせたいという思いが伝わってきました。一方で、なんとなくですが、Bさんが「A児は半周だけにしたいと担任が思っている」と考えていらつしやるように感じました。そのため、夕方のお迎えのときに「半周と書いたのはあくまでも、一周が無理という判断が出た場合のときの一案でしかないこと。午後の競技でもあり、Aちゃんへの身体的な負担によるストッパーがあるかどうかを知りたかったこと」を話しました。

Bさんから「こちらの早とちりでした。先生は半周に決定なんてまったく書いていないのに。障がい児をもつママ友たちの間で、リレー問題は絶対にくるからね」とずっと聞いていたから、ついに来たか！と構えてしまいました」と話してくださいました。私からも

「こちらの伝え方も不十分で申し訳ありません」と伝えました。

「リレー問題」とは、障がいのために走るが遅い子が、走る力はあるのに距離を強制的に短くされるといふ「風習」のことであった。

A児の力でバトンをつなぐ

担任としてもBさんと同じ思いでした。勝敗ではなく、A児の身体に問題がないのであれば、四月に面談した通り他の子と同じにするという考えです。実際のグラウンドに行き、クラスみんなで走ってみようということになりました。他の子も「ひろい」と大張り切りです。A児の番になりました。途中で嫌になるかな、座ってしまおうかな（お散歩に飽きたときはその場に座って抱っこを求めるため）と思いました。担任の心配をよそに、A児は走り切り、次の走者（担任）に「ハイ！」と笑顔でバトンを渡してくれました。Bさんにもその様子を伝え、万が一、A児が当日座り込むなど

た。そうすることで、練習ではA児のチームが負けることはあっても大差で負けることはなくなりました。時に勝つこともありました。

Bさんには、「大丈夫です。勝敗は関係ありません。Aちゃんがバトンをもらって、自分でパスする姿を楽しみにしてくださいね」と伝えました。

当日、A児は走り切りました。半周を過ぎたあたりから、普段の子どもたちからの声援に加えて、トラックを囲む応援席からA児を応援するたくさんの方が聞かれ、その声に答えるようにA児はいつも以上の笑顔で走り、「はい！」とバトンを渡してくれました。

考えてもらえたことが嬉しかった

A児の保護者とは、A児が中学生になった今も交流があります。卒園後にこの運動会のことをあらためて話したことがあります。その時のA児の保護者の話です。

した場合のみ、担任が手をつないで走るが、基本はA児が自分の力で自分のペースで次の走者にバトンを渡すことを決めました。

運動会当日まで、Bさんは、「A児がいるチームが負けますよね」「他の子がAと一緒に嫌がりませんか？」と、他の子の気持ちをずっと気にしてくださいました。四歳児クラスのため既に勝負心がある子もいたと思いますが、「Aちゃんがいるから遅くなる」というような声は聞かれませんでした。むしろ、A児が他の子に抜かれるたびに「Aちゃんががんばれ！あと少し！」と声援がありました。

実際の差としては、A児が一周走る（四歳児の平均から考えると、ゆっくり歩く程のスピード）間に、別チームと一周半程の差ができます。しかし、そこには解決策を考えました。クラスが奇数のため、人数調整が必要になります。A児の後に担任が走ることで、ある程度の差を縮めることができるという考えです。担任が走っても一周半の差をなくすことはできないため、A児のチームに足の速い子を少し多めに入れるようにしまし

よく、学校からもA児が楽しくできることが一番無理させなくていいんじゃない？と言われることがある。けれども、無理なく、が大人側の都合のいいように使われているように感じることがある。リレーにしても、Aちゃんがいるから負けると他の子が言っている、と言われると、親としては反論もできない。Aはたぶん、半周であっても一周であっても、他の子と自分が違うことも気づいていないだろうし、Aなりに楽しく走ると思う。でも、Aだけが半周しか走らない姿を見て、Aちゃんは走れない、と思う人もいるだろう。それは事実ではない。Aがいつでも自分で決断できる日が来たら別だけれど、そうじゃない間は、親として、園や学校に要求をしないといけないこともある。

それに、どういう基準で半周にする子としない子を分けるのか？という疑問も出る。障がいのない子の中にも走るのが遅い子はいる、一周何秒以内で走れる子は一周、それより遅い子が半周というような基準でもなく、ただ、障がいがある、というだけで、

距離を減らすことが何の問題もない当たり前のよう
にされるのがすごくおかしいと思う。

四歳の運動会、初めてのリレーだったから、連絡
帳にリレーのことが書いてあってつい構えてしまっ
たけれど、同じ四歳児として一周走ることを受け入
れていてくれたこと、一周走れるように考えてもら
えたことが嬉しかった。それに、他の子が云々も一
回も先生は言わなかった。むしろクラスみんなが「A
ちゃんががんばれ」と言い、さらには他の保護者の、
Aを知っている人、知らない人みんながAがゴール
することにあんなに応援をしてくれていた。そして
その時のAの満足そうな笑顔。それが今でも忘れら
れない。

という話をしてくださいました。

A児の保育については、運動会や活動のことだけで
なく、トイレトレーニングの成功・失敗状況、A児な
りの言葉や意思疎通方法、食材の大きさ、着替えの方
法、療育のことなどたくさんのお話をBさんと連絡帳

A児が五歳児クラスに進級した後のことです。私は
既に園を退職していましたが、時々耳に入ってくる情
報から、クラス担任とBさんとの関係はあまり良いも
のにはなっていないという印象がありました。

A児の目標に対しても「これはAちゃんはできません
ん」という返事が多かったようです。特に行事ごとに
関するクラス担任や園の対応は、Bさんにとって辛い
ものだったと聞きました。Bさんの要望を伝えるまで
もなく「こちらで考えているから、任せて受け入れて
ほしい。Bさんはなぜ、Aちゃんの現状で満足できな
いのか。Aちゃんに無理をさせても良くないだけだ」
という返答が園からあったそうです。Bさんからは「園
からそう言われたら、保護者は黙るしかありません。
少し反撃したけれど聞く耳持たずでした。信頼関係が
一気に破綻しました」との声がありました。

先の「園で考えるから任せて受け入れてほしい」と
いう言葉は、子どもの保育から保護者を除外した考え
です。

園がこの言葉をBさんに伝える判断に至らせた原因

等を通して話しました。やり取りに使用した連絡帳は、
四歳児クラスの一年間で四冊になりました。

Bさんとのやり取りについて、「保護者にどんな支援
をしていたの？」と聞かれると答えに戸惑います。支
援をしていたというよりも、家庭の様子を尋ね、園の
様子を伝え、その中でBさんと担任双方が「じゃあこ
うしましょうか」「こんなふうにしてみましたよ」と、
互いに考え合って保育をつくっていたように思います。
支援を「保育者が一方的に支える関わり」として捉
えるのであれば、Bさんとの関係は、支援ではありません
でした。担任と保護者が互いに支え合い、一緒に
子どもの保育を考え合う仲間の関係だったように思っ
ています。

できていなかった「支援」

当時、私を含め担任がすべきだったのにできなかった
A児やBさんに対する「支援」があります。それは、
園内で共通理解を図ることです。

の一つには、前年度担任の私がすべきだった支援のあ
り方に不足があったからです。四歳児クラスの時、担
任と副担任とはA児の保育についてよく話をしまし
た。Bさんの思いについても話し、考え、保育につな
げました。しかし、それらは担任間では共有できてい
たけれども、園内には共有できていませんでした。ど
こ自分のなかに「四歳児ではこうしていたんだから、
次の年もしてくれるだろう」という勝手な思い込みが
あったように感じます。

運動会のリレーに関しても、担任外の職員から見
たら「A児の遅れを担当が走ってカバーする」とだけ理
解されてしまっていたのかもしれないと気付きました。
Bさんの、なぜ一周をA児に走らせたいと思っ
ていらっ
しゃったのかの考えや、他の子と「一緒」にすること
への願い、普段の保育を通して担任として考えたこと、
工夫した保育の方法などを、もっと園内に知らせてお
かなければならなかったのではないかと強く後悔しま
した。

担任が変われば、保育の方法などは当然変わります。

季刊 保育問題研究

編集●全国保育問題研究協議会編集委員会



特集

保護者への「支援」を越えて ともに考えあい わかりあう関係づくり

保護者と一緒に考える保育 上原真幸

保護者の「応答能力」と子育て共同の課題 楠 凡之

〈共に居る〉ソーシャルワーク 義基祐正

児童発達支援事業所となった「療育」の場で保護者と共に歩む 野本千明

連絡帳をとおした保育者と保護者の相互理解 二宮祐子

それを子育て支援というのなら 白瀧宏子

子ども食堂の経験を通して 高橋 亮

子「守り」から子育て「支援」まで 清水民子

[追悼] 望月彰さん 渡邊保博 よこやまじゅん

[投稿] 児童文学者 松谷みよ子の人生と作品(その1) 松川礼子

声明 ロシアによるウクライナ侵攻に反対する

傾聴と対話

しかし、担任が変わることによって保護者が振り回されてしまうことは避けなければなりません。

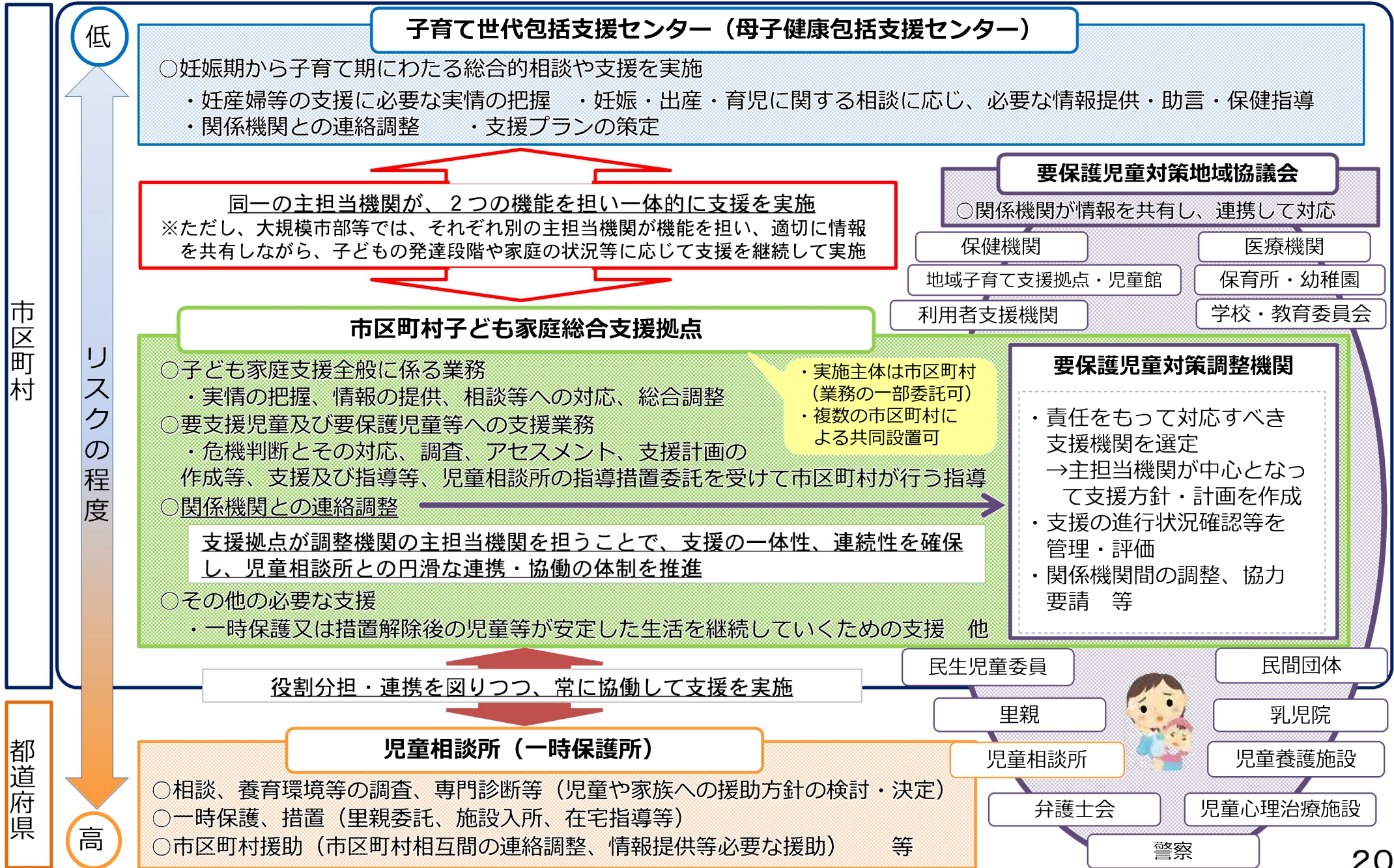
本原稿を書くにあたり、久しぶりにBさんに連絡を取りました。Bさんにとって支援って何だと考えますか？と尋ねたところ「四歳児のときと、五歳児のときと決定的に違うのは、保護者の思いや考えをしっかりと聴いてもらえたかどうか。そして、先生方の思いや、保育園の事情を聞かせてもらって、対話し、お互い納得する結論に達することができたかどうか。支援は傾聴と対話、これに尽きると思います。あの大量の連絡帳のやりとりは、私にとっては何よりの寄り添いであり、支援でした。子育ての力強いパートナー、応援者

がいる感覚でした」と話してくださいました。一方的な支援は、時に支援すべき当事者をその場から除外してしまうことにもなりかねません。保育者が支援をした気になって、肝心の保護者の気持ちが保育者から離れてしまっている状態を良い方向に動かすことができなくなってしまう。

傾聴と対話は、社会福祉領域における支援姿勢の基本中の基本ともいえます。保育に求められる多様な業務を行う中で、時に愚痴を吐くことは必要です（もちろん愚痴を吐く場所はしっかりと考えましょう）。けれども愚痴を吐いたら、その分、基本の姿勢を見直す意識を忘れずにいたいと思います。

(つえはら・まさき)

(参考) 市区町村における児童等に対する必要な支援を行う体制の関係整理 (イメージ図)



※ 子育て世代包括支援センターや市区町村子ども家庭総合支援拠点の設置に当たっては、同一機関が2つの機能を担うなどの設置方法を含め、各市区町村の母子保健及び子ども家庭相談の体制や実情に応じて検討すること。

事例「佐藤さんのケース」

佐藤太郎さん（以下、佐藤さん）は、A 保育園に子どもの一郎くん（2 歳 1 か月）を、生後 6 か月から通わせています。送迎は妻の花子さんと二人で分担し、二人とも送迎時は担任保育士（以下、担任）とよく話をしていました。

この 2,3 週間、夫婦ともに疲れた様子がみられたので、担任が声をかけますが、二人とも「大丈夫です」と返すだけでした。その後、送迎は佐藤さん（夫）だけとなりました。担任は佐藤さんに声をかけますが、何も答えず担任を避けているようでした。

園長、主任保育士（以下、主任）も担任とともに こまめに声をかけ、見守っていますが……。

○佐藤さんの様子

疲れた様子で、表情が暗く、ほぼ毎日同じ服を着ている。

目は充血し、髪はボサボサのことが多い。

連絡帳には「よろしくお願いします」とだけ記入している。

あいさつをしても、ほとんど目を合わせてくれない。

○一郎くんの様子

朝、顔が汚れており、時々、臭いが気になる。

オムツかぶれがよくならない。

食事をガツガツ食べるのが気になる。

そこで、職員会議の結果、佐藤さんと面談することになりました。

（以下、その会話の様子）

【佐藤①】一郎といると、イライラすることがあって……。

【担任①】イライラすることがあると……。どのようなときにイライラするのですか？
差し支えなければお聞かせください。

【佐藤②】ええと……。ごはんのときですね。ごはんをなかなか食べてくれなくて…。

【担任②】ああ、ごはんのときですか。

【佐藤③】そうです。イスの上に立ったり、テーブルの上に這い出そうとして……
ごはんの間、最初から最後までそんな感じなんです。
どうしていいかわからなくて……。

【担任③】ごはんの間、ずっと動きまわっていて、どうしてよいかわからない？

【佐藤④】ええ、押さえつけられると一郎は嫌がるので、私はぐったりです。

（中略）

【佐藤⑤】ここ（保育所）に来て、先生やほかのお父さんやお母さんたちを見ていると、何かこう …… 。

【担任④】よければ、そのときの佐藤さんの気持ちをお聞かせください。

【佐藤⑤】何か、自分だけがうまくいっていないように思えて、情けなくて、とてもつらく感じます。

【担任⑤】とてもつらく感じるのですね。

主任と担任で佐藤さんと面談をしたところ、以下の状況がわかりました。

- 自営業を営んでいたが3か月前に倒産した。
- 次の仕事を探していたが、体調が悪くなり、病院での検査の結果、心臓疾患が判明した。
- 医師からあまり無理をしないようにと言われた。
- ストレスや不安を妻の花子さんに向けてしまい、夫婦仲は悪化し、花子さんは家出をした。
- その後、離婚し、どこへ行ったのかもわからない。
- 求職活動はうまくいかず、貯金を切り崩して生活しており、生活が苦しい。
- 自分の実家や親戚には頼れない。
- 子どものこと、育児や家事の仕方がよくわからない。

主任は佐藤さんをねぎらうとともに、「園でできることはしますので、ちょっとしたことで結構です。声をかけてください」と伝えた。その後、職員全体で情報を共有するとともに、日々、佐藤さん親子を見守ったり、こまめに声をかけたりすることにした。

最初の面談から1か月後の様子です。

以下の様子から、状況が少しずつ改善されていると判断し、同じ内容の支援を続けることにしました。

○担任を中心に日々、佐藤さんにあいさつや声かけをしたところ、少しずつ佐藤さんもあいさつを返すようになった。子育てに関する質問などはない。

○一郎くんの顔は汚れていることがあるが、ガツガツと食事をするのが少なくなった。

○園長が佐藤さんに声をかけたところ、佐藤さんは福祉事務所に行き、生活保護を申請したとのことだった。

最初の面談から6か月後の様子です。

○佐藤さんは以前のような暗い表情がなくなるとともに、送迎時には佐藤さんから職員にあいさつをするようになった。

○一郎くんの清潔がほぼ保たれ、ガツガツと食事をすることはなくなった。

○園長と主任で佐藤さんと面談を行った。生活保護費が支給され、通院をし、生活が安定しつつあるとのことだった。

○また、子育てについては慣れないことも多いが、担任に質問したり、ほかのサービスを利用したりして、自分なりに一郎くんにかかわっているとのことだった。

出典：保育士等キャリアアップ研修保護者支援・子育て支援テキスト

情報収集シート（例）

児童氏名		保護者氏名			
住所		連絡先			
これまでの親子の状況・面談内容					
項目		問題あり	気になる	問題なし	具体的な状況
① 子ども の 状 況	健康・発育				
	発達				
	基本的な生活習慣（身辺自立）				
	対人関係（保育者・他児）				
	情緒				
② 家庭 での 養 育 状 況	親子関係（子→保護者、保護者→子への態度）				
	生活リズム（食事・睡眠）				
	衛生・保健・事故防止・監護				
	登園状況				
③ 家 族 の 状 況	保護者の心身の状況				
	家族関係				
	社会関係（園との関係含む）				
	就労状況				
	経済状況				
上記を踏まえて、親子の抱える問題					